ISSN 0285-4643

巻頭言
二〇二四年のアジア史・東洋史学コース　植田喜兵成智　1

論説
『史記』と出土文献における秦の二世皇帝　陳侃理（柿沼陽平訳）　2
周王朝の「文王」と、「経緯天地曰文」の源流について　豊田　久　18
李基白史学の歴史的背景に関する一考察―生誕百年に寄せて　李　成　市　42
中華民国時期江蘇省無錫県栄巷鎮における農村経済の発展
――小丁巷・鄭巷・楊木橋3ヶ村を例として――　弁納　才一　86

翻訳論説
古代中華帝国形成期における財政の変容
――前四世紀後半から前一世紀を中心に――（中）（柿沼陽平監訳・日坂優太訳）　マキシム・コロルコフ　87
「民族」の建設は容易だが、「市民」の創造は困難である
――辺境をどのように見て、いかに理解するか　王　明珂（長谷川大和訳）　104
農村変遷的堅韌女性　蕭美季女士訪問記録　潘美慈・曽獻緯（弁納　才一訳）　156

訳注
『後漢書』西羌伝訳注（六）　長江流域文化研究所編　157
『慈溪黄氏日抄分類』申明訳注　その四
巻七一　申明二　初任諸司差委事（続）　宋代史ゼミナール　184

資料紹介
第二任浙西提擧司帳管
黄興は早稲田の学生だった？：僅かなかけらが示すもの　柿沼陽平・王博　小二田　章　235

紀行文
二〇二四年雲南省諸葛南征関連遺跡踏査記　鮫島玄樹・森田大智　242
陝西省西安市・青海省内史跡等踏査記　斎藤賢・田熊敬之・新津健一郎・峰雪幸人　284

追悼文
游彪君を悼む　近藤　一成　329

彙報　332

史滴 SHITEKI

46

早稲田大学
東洋史懇話会

2024年12月

二〇二四年雲南省諸葛南征関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・森田大智

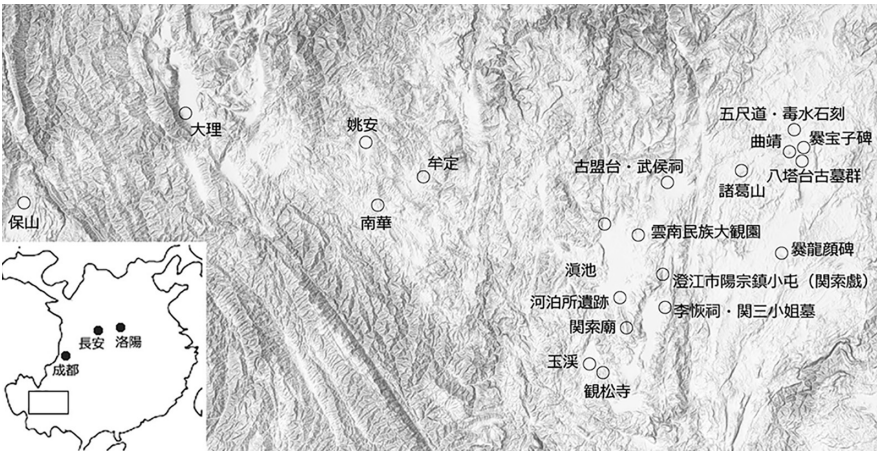
はじめに

二〇二四年八月一六日～二二日、柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・森田大智は雲南省に点在する諸葛南征関連遺跡を踏査し、かつ現地の博物館で関連史料を見学した【図1】。本稿はその踏査記録である。踏査地点は、雲南省の保山市・大理白族自治州・昆明市・玉溪市・曲靖市に及ぶ。

いわゆる諸葛南征とは、三国時代に成都を拠点とした蜀漢の丞相諸葛亮が、成都以南へ遠征したことをさす。基礎史料として『三国志』や『華陽国志』等がある。先行研究も多く、姜南や羅開玉の専門書のほか[1]、各地域の遺跡や伝承にかんする論文がある。南征軍の行軍ルートやその到達地点をめぐっては論争がある。諸葛亮本人が昆明まで到達した点にほぼ異論はないものの、昆明より奥地に至ったかは確言しがたい。保山・大理まで達したとする論者もいれば[2]、そこまでは達していないとする論者もいる[3]。

たとえば本文編著者の柿沼陽平は、諸葛亮本隊が昆明まで達した点は認めるものの、保山や大理にまで達したとのべる史料は後世のものであって、後世の史料になればなるほど諸葛南征の範囲を広く捉える傾向があるとし、諸葛亮本隊が昆明よりもさらに西方や南方にまで至った点には否定的である[4]。これによれば、保山や大理に「諸葛亮関連遺跡」があるのは不自然であり、そうした「遺跡」は諸葛亮没後に「南征の範囲」が広まった結果、後付けで作られたものにすぎないことになる。

加えて、たとえば玉溪市には関索や関銀屏にまつわる史跡が多いが、いうまでもなく、それらの人物は実在せず、あく



【図１】 昆明・玉溪・曲靖の地形図（柿沼作図）

までも後世生み出された架空の存在にすぎない。ゆえに関索や関銀屏にかかわる「史跡」も後世の産物である。それにもかかわらず、それらを調査する意義は、諸葛南征の史実を追求するためではなく、むしろ「諸葛南征が当地でいかに語りつがれ、創造されたのか」という現地民の記憶や信仰を解明する点にある。[5] 以下、旅程に沿って詳細を述べる。

八月一六日（金）

王はHU七二一一（北京七時二〇分発）とC三四八（昆明一七時二六分発）を乗り継いで保山駅に到着。レンタカーを確保し、悦辰酒店（保山火車站店）に宿泊。鮫島はMU五七〇四（北京一〇時三〇分発）で昆明に向かい、続いてK六一〇六（昆明二〇時五〇分発）で保山に向かった。

八月一七日（土）

鮫島は五時半に悦辰酒店（保山火車站店）に到着した。八時半に、王・鮫島は悦辰酒店より保山雲瑞空港へ移動。柿沼はMU九七四八（成都七時五〇分発）で保山雲瑞空港に到着。九時半頃に王・鮫島・柿沼合流。

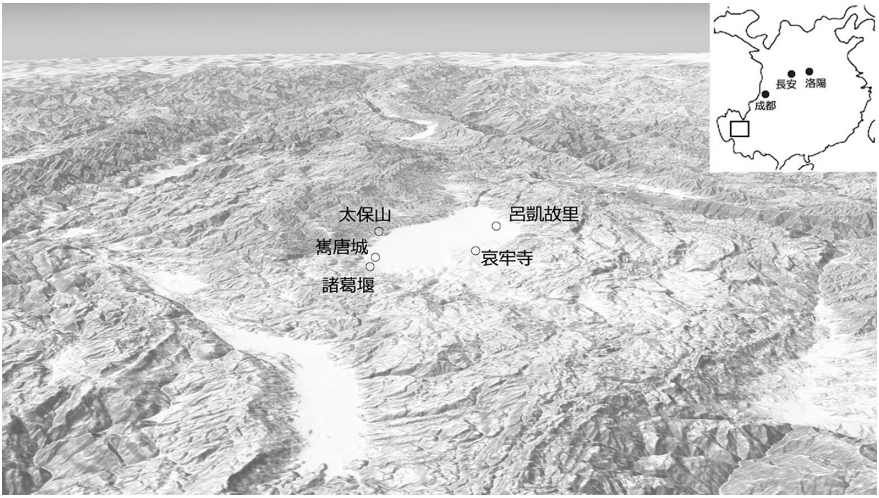
保山市は雲南省南西部に位置し、ミャンマーと境を接する都市で、後漢時代の永昌郡にあたる。永昌郡は明帝期に哀牢王の降伏をうけて設置された郡である。[6] 保山市の諸葛南征関連遺跡については整理があり、[7] 保山を含む雲南西部地域の諸

葛亮伝説についても研究があるので、[8]それらをふまえて踏査した【図2、図3】。

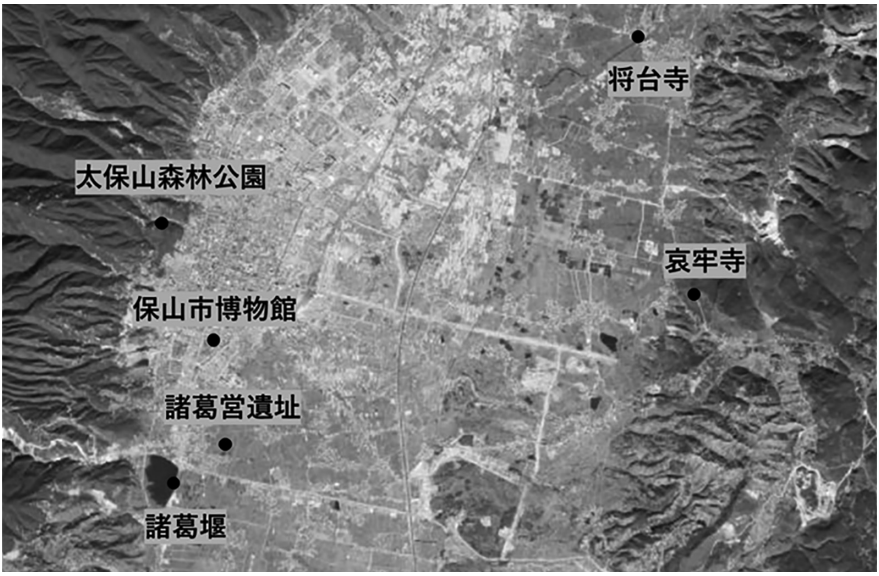
保山雲瑞空港から国道G三二〇を北上し、漢営村へ向かう。漢営村は諸葛営や諸葛村ともいう。[9]一説には、諸葛亮が孟獲を捕えてここに屯営を築いたのち、遺民が武侯祠を建てて諸葛村と名付けたという。[10]村民は諸葛亮の遺民を自称し、「舊漢人」と呼ばれることもある。[11]

九時五六分、漢営村南西の諸葛堰（25°04'34.6"N、99°09'15.6"E）に到着【図4、図5】。当地は、国道G三二〇の西側、大沙河の南岸に位置する。現地の保山市重点文物保護単位碑によると、本遺跡は俗称を大海子といい、諸葛南征時に洗馬池が築かれたため、のちに「諸葛堰」と名付けられ、堰の高さは九・五メートル（以下、m）、長さは一八〇〇m、堰の頂上の幅は二・五m、容量は二二〇万m^3だという。地方志によれば、この地にはもともと三つの堰があり、大諸葛堰・小諸葛堰・東岳堰、あるいは諸葛堰・中堰・小堰とよばれていた。[12]また諸葛堰は、明の成化年間（一四六五年～一四八七年）に御史の朱皚によって修復されたため、「御史堰」とよばれたこともある。[13]諸葛堰東側の土手上から内側を眺めたところ、現在も少量ながら貯水があり、大部分は草に覆われていた。諸葛堰の機能や関連碑文については『保山市水利志』にくわしい。[14]

大沙河河畔には走馬場跡があり、かつては走馬盛会という



【図2】 保山の地形（柿沼作図）



【図３】　保山市のおもな訪問先（鮫島作図）

【図４】　漢営村周辺

【図５】　諸葛堰

催しが行われ、民国期に廃れたといわれる。[15] 明代には走馬盛会に関係する「観騎楼」なる建築物があったらしく、[16] 現存しない。大沙河の旧河道は諸葛営遺跡（後述）北側を通っていたため、[17] 走馬場はその南側であろう。当地は現在ほぼ農地として利用されている。なお漢営村の東五キロ程のところに「保山漢営走馬古鎮」なる最近の観光地もあるらしいが、行かなかった。

諸葛堰の北東に漢営村が広がっている。車で村内に入ったが、道路が狭いため途中下車し、徒歩で村東部のはずれに向かった。

一〇時二二分、諸葛営遺跡（25°04'58.2"N、99°09'45.4"E）に到着【図６】。李枝彩によると、遺跡は東西三七〇ｍ、南北三一五ｍ、総面積一一・六万平方㎡で、西側には外郭があった。後漢時代の磚などが発掘され、少なくとも後漢中晩期には大規模な建築があったとみられ、周辺からは西晋の「元康四年」磚なども発掘されている。[18] また雲南省文物考古研究所は二〇〇五年に城壁・濠・建築物跡・火災跡等を発掘調査し、西側城壁が南側に二二〇ｍほど、北側城壁が西に二五〇ｍほどのびていたことを確認し、付郭もしくは外城であると推測する。さらに、永昌郡郡治が不韋県（保山市金鶏郷）、嶲唐城が後漢永平一〇年（六七年）設置の益州西部都尉の治所で大理白族自治州雲龍県にあるとの説を批判し、[19] 保山市金鶏郷や雲龍県で城跡が未発見であること、益州西部都尉の代

【図６】　諸葛営遺跡西側城壁南側延伸部分

わりに永昌郡が設置されたときに益州西部都尉鄭純がそのまま永昌太守に遷任されていること、彼の死後に哀牢王が嶲唐城を攻めて永昌太守王尋を破ったと史料にあることから、[20]「最初期の永昌郡治＝嶲唐城＝本城跡」とする。[21] 本城趾南西にはかつて永昌道（南方シルクロードの一部）があったので、[22] 諸葛営付近の地域は交易・軍事の要地だったであろう。[23]

諸葛営遺跡付近には雲南省重点文物保護単位「諸葛営遺跡」碑（一九九三年立碑）と全国重点文物保護単位「漢荘城址」碑（二〇〇一年立碑）があった。後者によれば、ここからは「建武四年」磚や「長樂壽未央」磚が出土し、雲南省でもっとも代表的な漢代文化遺産であるという。現在はほぼ農地と道路になっており、すぐ東側に杭瑞高速が通っている。当日は雑草が多かったが、城壁跡らしき土手がみえ、西側城壁の延伸部分も確認できた。雲南省には諸葛亮の名を冠する城跡が多く、羅開玉が列挙している。[24] なお漢営村東側にはもともと「東嶽堰」（別名「小海子」）があり、諸葛亮が旗を立てた台（旗台）や、[25]「右軍台」（王羲之の碑刻）もあったとのことであるが、[26] 現在はほぼ農地化され、小規模な溜池が点在するのみである。

漢営村で高齢の住民に聞き取り調査をしたところ、彼らはなお蜀漢兵の遺民の子孫を自認し、村内に諸葛氏が残っているとし、若い世代は自分たちの歴史的背景を知らないとのべていた。村内には公園があり、壁面に「漢営」と記され、諸

葛亮・関羽・張飛らしき人物と軍営の絵が描かれていた。ちなみに諸葛営には武侯祠もあったはずであるが、清・咸豊一一年（一八六一年）に偽揚威都督の蔡七児が数万の賊軍を率いて蜂起し、同年二月一四日に副将福申の駐屯していた諸葛営に到達したさい[27]、武侯祠は破壊され、以来修復されていないらしい[28]。羅開玉によると、南中地域の諸葛亮信仰は孔子や関羽の信仰を超えるものがあり、きっかけは唐の玄宗の天宝七年（七四八年）に歴代忠臣廟建設命令が出されたときに遡るという[29]。

一〇時四五分、東岳廟（25°04'56.2"N、99°09'34.4"E）に到着。東岳廟は康熙帝期（一六六二年～一七二二年）に修築されたのちに焼け落ち、乾隆四七年（一七八二年）と道光五年（一八二五年）に修築された。のち咸豊一一年（一八六一年）の兵乱で破壊され、のち修築された[30]。現在の建築物はかなり新しい。正面の建築は村民の図書室、右側建築は展示スペースになっている。その「漢営東岳廟簡介」によると、本廟は唐代創建で、老朽化のため二〇一八年～二〇二四年二月に修復されたという。東岳廟前の道路沿いに面した壁面には、修復工事に寄付した者の名簿と、寄付者の石碑を建立するとの告知が掲出されていた。

漢営村を出発し、国道G三二〇を北上して保山市博物館（25°06'08.3"N、99°09'44.4"E）に向かう。一一時二〇分に到着したが、もうすぐ昼休みなので三〇分ほどで退館するよう告げられた。博物館は銅鼓の形を摸した建築で、哀牢国を主題にした展示のほか、諸葛営遺跡などの保山市内の諸葛南征関連遺跡が紹介されていた。急ぎ足で参観を済ませたのち、売店で書籍をチェックした。昼食を済ませ、太保山森林公園に向かった。

一二時四八分、太保山森林公園の麓（25°07'08.9"N、99°09'15.0"E）に到着。太保山は保山市中心の西に位置する山で、明清時代には永昌府など重要拠点が置かれた。山を登り始めてすぐに玉皇閣があり、全国重点文物保護単位碑が置かれている。登山道を登ること二〇分、一三時一一分に武侯祠に到着した【図7、8】。武侯祠入口には、保山市重点文物保護単位碑（二〇一二年立碑）がある。

この武侯祠は嘉靖年間（一五二二～一五六六年）に建立され、康熙二六年（一六八七年）に再建された。しかし漢営村の武侯祠と同じく咸豊一一年（一八六一年）の兵乱で破壊され、光緒五年（一八七九年）に部分的に再建された[31]。廟の正殿は施錠されていたが、外側から諸葛亮・呂凱・王伉の像を見ることができた。呂凱・王伉は諸葛南征に際して、永昌郡を守備して功績があった人物である[32]。武侯祠裏に保山歴史名人堂があり、呂凱と王伉のレリーフが飾られていた。

武侯祠裏には太保公園碑林もあった。その隆陽区重点文物保護単位碑（一九八四年立碑）によれば、この碑林は一九八四年に創建され、廟や永昌府にかんする明～民国の石碑が保

【図７】　太保山武侯祠

【図８】　太保山武侯祠諸葛亮像

存されているという。[33] 碑林とその周辺を参観していると、碑林からすこし外れた場所に多数の石碑が無造作に放置されていた。明清の墓誌のほか、モンゴル語の仏教関係と思しい碑もあり、北元の「宣光」という紀年（一三七一～一三七八年）がみえた【図9、10、11】。どういった経緯で放置されているのかわからないが、保存状態が気になるところである。

武侯祠周辺の太保山山頂付近は、永昌府城の城壁跡が散在しており、保山市重点文物保護単位碑が建てられている。太保山には「糧堆」や「保山断脈」と呼ばれる場所もあり、諸葛亮に関連する言い伝えがある。[34] ただ、具体的にどこを指しているのかはわからなかった。下山中、雲南における反清運動の功労者の楊振鴻（一八七四～一九〇九）や彭蓂（一八八八～一九一二年）の墓があった。玉皇閣を見学し、太保山を後にする。

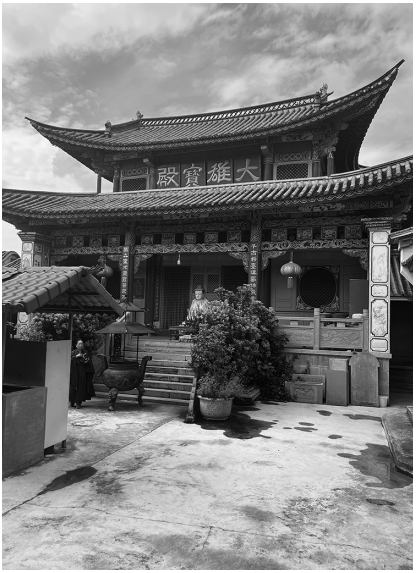
北東に向かって車で走ること一時間、一五時四二分に金鶏郷に到着した。ここは呂凱の故郷とされている。[35] 金鶏中学北西の川沿いには、民国期の石標があり、「漢陽遷亭侯雲南太守呂季平先生故里」の文字があった【図12】。

そこから川を渡った北側の高台に、将台寺（25°09'31.7"N、99°14'56.7"E）がある【図13】。[36] ここにはもともと呂凱の作った台があったらしい。[37] 寺内の掲示によれば、この寺の建立は明清交替期で、はじめは劉備・関羽・張飛・諸葛亮・呂凱らを祀っていたが、徐々に仏教の活動場所になっていっ

【図9】 明清永昌府城跡と散乱する石碑

【図11】 宣光 3 年 6 月碑

【図10】 明代弘治11年11月碑



【図13】 将台寺

【図12】 呂凱故里石標

たという。伝承によれば、寺の前のカイノキは諸葛亮の杖になったとも、呂凱が馬をつないだ場所ともされ、ガジュマルは諸葛亮の羽扇になったとも、呂凱の馬鞭になったともいわれている。じっさい、寺の南側にはカイノキとガジュマルが生えていたが、設置されていた古樹名木保護牌によると、カイノキの樹齢は一五〇〇年、ガジュマルは一〇〇年とのことであった。

寺は南側が急斜面に臨んでいるため、北側に入り口がある。北側の外壁には、「點將」、「古城遺跡」と書かれ、諸葛亮らしき人物と、軍勢の絵が描かれていた。寺内東側の建物内部には諸葛亮像がある。左右に六体の武将像もあり、一つは呂凱であろうが、寺内の僧侶に聞いてもどれが誰だかわからないとのこと[38]【図14】。なお金鶏郷には立釪石（呂凱が戟を置いた石）があるとされるが[39]、見当たらなかった。また将台寺周辺は漢代永昌郡治の不韋県にあたり[40]、金鶏村北に古城坡遺跡があるとされるが、城壁は見つかっていないとのこと[41]。帰り際に、僧侶から親切にも「中元節なので精進料理を振る舞う」といわれたが、遠慮した。

続いて哀牢寺に向かった【図15、図16】。哀牢寺のある山（哀牢山）は太保山の東にあり、向かい合うようになっている。伝承によれば、哀牢山には本来「天井」なる井戸があって水量が増減し、現地民はその水量から豊作か凶作かを占ったという。また山下には「玉泉」と呼ばれる二つの井戸もあっ

【図14】　将台寺の諸葛亮・呂凱（南蛮指掌図をもつ）など

【図15】　哀牢山より保山市街をのぞむ

【図16】　哀牢寺

た。[42] また、哀牢山上の井戸はもともと諸葛亮が掘ったもので、「諸葛井」と呼ばれ、井戸の中には燈のような明かりがみえるとの伝説もある。[43] だが哀牢寺の洞窟内に井戸らしきものは見つけられなかった。

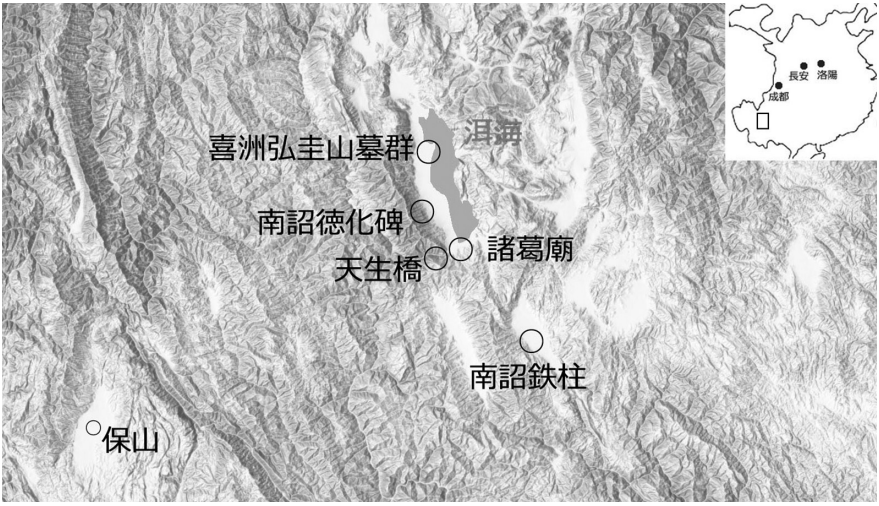
保山駅に到着後、レンタカーを返し、夕食をとる。列車に乗り遅れたので、切符を買い直し、C三七〇（一九時一五分保山発）で大理へ向かい、大理駅で新たにレンタカーを借りた。そのころ森田は、MU二九二（名古屋八時五五分発）とMU五八二（上海一七時〇五分発）を乗り継いで大理に到着。各々大理漫湾麗呈酒店に移動して合流し、宿泊。

八月一八日（日）

八時四五分、大理漫湾麗呈酒店出発【図17】。

九時一〇分、大理白族博物館（25°36'00.0"N、100°13'49.6"E）着。旧石器時代～中国共産党長征期の幅広い遺物が展示され、諸葛南征関連のものとして蜀漢紀年磚があった。既述の通り、諸葛亮本人は大理・保山まで到達していないが、保山市から蜀漢紀年磚が出土しているため、当地には蜀漢の影響力が及んでいたと考えられる。[44] 本紀年磚こそその証拠である【図18】。

博物館にはほかに大理市喜洲鎮弘圭山墓群出土の後漢永元六年（九四年）磚、蜀漢延熙紀年磚、西晋太康六年（二八五）磚が展示され、[45] 後漢・蜀漢・西晋の影響力が大理地方に及ん



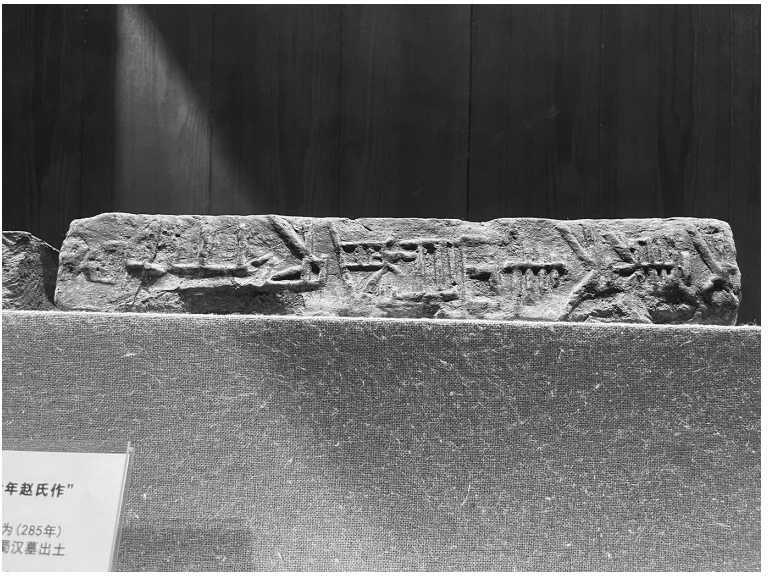
【図17】 大理の地形（柿沼作図）

【図18】 蜀漢延熙紀年磚

でいたことをしめすようである【図19、20】。さらに、大理製薬場後漢墓出土陶楼明器上に座禅をくむ人物がいる点は、そのころの仏教伝播によるものかとも思われて興味深い【図21、22】。また大理市大展屯後漢墓出土陶水田明器には男根像が屹立し、これは銅鼓にもみられるモチーフであって、漢代雲南男根崇拝を窺わせる【図23】。一〇時、博物館出発。

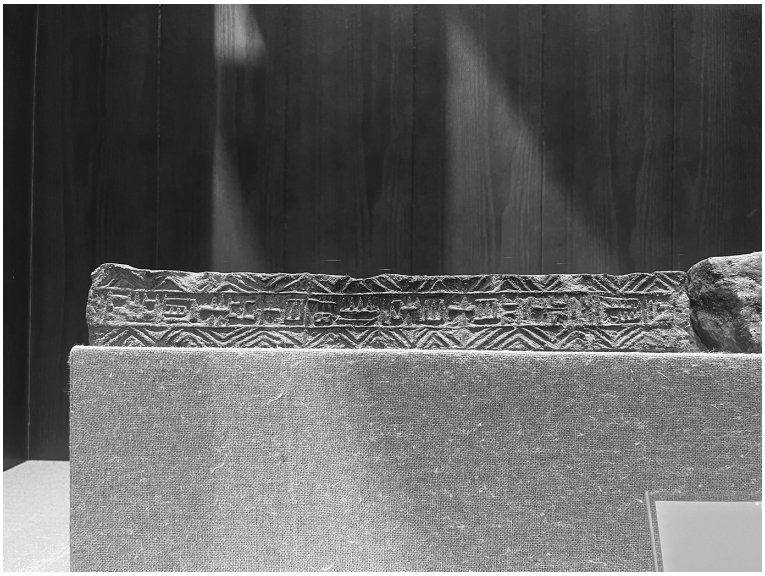
一〇時二〇分、天生橋・江風寺入口（25°34'47.8"N、100°12'07.8"E）着。雲南には天生橋なる地名が散見し、我々が訪れた天生橋は明清地方志等にみえ、天橋・石馬橋とも呼ばれた[46]。「江風寺」の名は明清地方志にみえないが、乾隆三七年（一七七二年）～同四七年（一七八二年）の清・呉大勛『滇南聞見録』によれば、天生橋を渡った先に、仏僧の住む小廟があったという[47]。

踏査時、入口付近には多くの人が湧水を汲みに来ていた【図24】。また寺への寄付者名を記した功徳碑があった。陳愛国によれば、江風寺は付近の打魚村が管理し、二〇〇二～二〇〇九年に村民の寄付で大幅修繕が行われ、そのとき雨師・風伯に加え、新たに小黄龍を祀るようになったという[48]。現地民に尋ねたところ、同様の答えが得られた。江風寺境内にはいくつかの碑文があり、「漢諸葛武侯擒孟獲處」碑と南明永暦五年（一六五一年）碑がとくに古そうである【図25、26】。だが前者は損傷で紀年がみえず、後者は一部コンクリートのようなもので塗り固められ、「天生杞」に作るが、詳細不明。

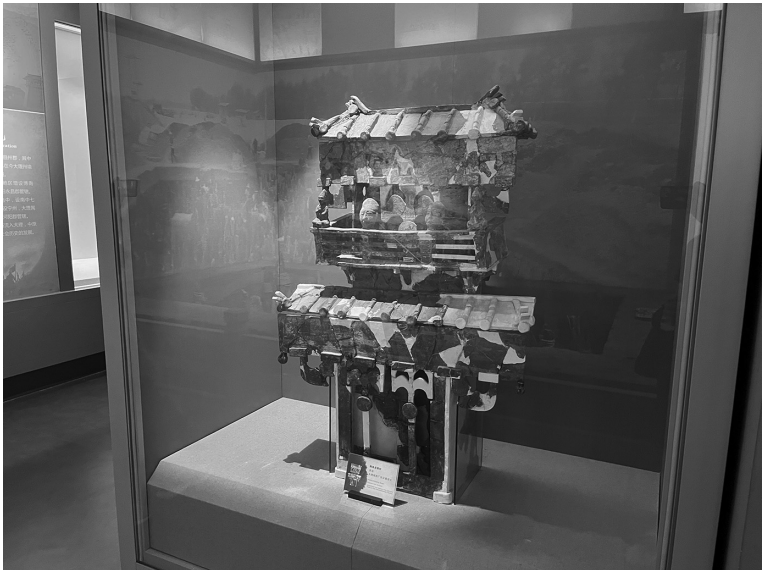


【図19-1】　西晋太康六年磚

【図19-2】　後漢永元六年磚



【図20】　西晋太康六年磚



【図21】　大理製薬場後漢漢墓出土の陶楼明器

【図22】 大理製薬場後漢墓出土陶楼明器上の座禅をくむ人物

【図23】 大理市大展屯後漢墓出土陶水田明器と男根

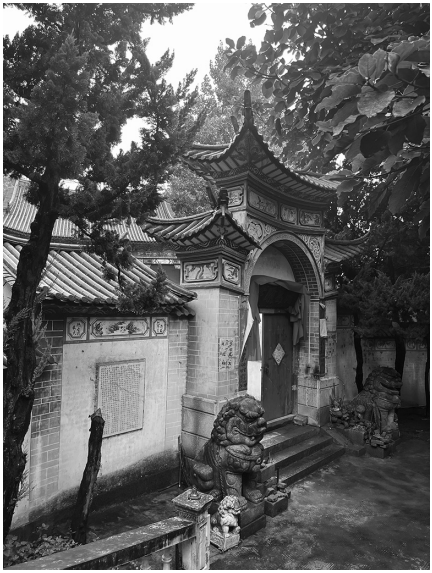
一〇時四五分、天生橋・江風寺出発。

一一時五分、諸葛廟（25°34'10.5"N 100°11'10.7"E）着【図27】。大理の諸葛廟は大理栖谷温泉酒店の敷地内にある。現地民によれば、これは白族の諸葛廟であるという。現地の「孔明碑文」によれば、一九九八年にできたもののようで、由来は古くなさそうである。諸葛亮が祀られる中央の廟に加え、左右にも廟がある。寄付で成り立っているらしく、功徳碑があった。その後、大理駅付近で昼食をとり、鮫島・森田は高鉄（D三九五四、一二時四五分発、一四時四三分昆明駅着）で昆明に向かい、柿沼・王はレンタカーで別行動をとった。

【図24】　天生橋前の水汲み場

【図25】　江風寺と「漢諸葛武侯擒孟獲處」碑

【図26】　永暦五年碑



【図27】　温泉街の諸葛廟

鮫島・森田は宿泊先の雲南文化主題銘宿に荷物を置き、一六時に雲南省博物館着（微信のミニプログラム等による事前予約必要）。銅鼓などをみることができたが、碑文などはレプリカも多かった。一七時一〇分、タクシーを呼び、雲南省博物館出発。

一七時四〇分、雲南民族大観園内の昔日武侯扎営処（24°58'56.7"N 102°50'48.0"E）に到着。雲南民族大観園はすでに閉園時間だったため、人はまばらだった。昔日武侯扎営処には諸葛亮・劉備・張飛・関羽・趙雲・孟獲・関興の現代風石像があり、背面に「昔日武侯扎營處」の字がある【図28】。周囲は「許願池」という釣り堀で、竿や餌も借りることがで

きる。雲南民族大観園閉園後も釣り堀は使用可能で、一〇人ほどの太公望が釣り糸を垂れていた。なお昔日武侯扎営処にほんとうに諸葛亮の営があったとの史的根拠はない。見学後、バスに乗って昆明駅に向かい、柿沼・王と合流。

一方、柿沼・王は諸葛廟見学後、鮫島・森田と別行動をとり、レンタカーで太和城遺跡へ。途中で昼食をとる。

一三時一〇分、太和城遺跡到着。当該城は七三八年～七七九年まで南詔国の政治・経済・文化の中心だった。城内西側にある南詔徳化碑は七六六年に立てられ、天宝年間前後の南詔と唐との戦争の経緯と、南詔初期の政治・経済・文化の状況をのべたものである。碑高一m、幅二・四六m、厚さ〇・五八m。全国第一批重点文物保護単位【図29、30】。たいへん有名な文物なので説明は省く。

一四時五〇分、南詔鉄柱に到着。南詔鉄柱は廟内にあった。廟全体が修繕工事中で、鉄柱周囲にも青いビニールシートが張り巡らされていた。鉄柱正面には文字があり、背面・側面に文字はない【図31、32】。

夕飯をとり、雲南文化主題銘宿に宿泊。

【図28】 石像裏面「昔日武侯扎營處」

【図29】 南詔徳化碑

【図31】　南詔鉄柱

【図30】　南詔徳化碑の一部拡大

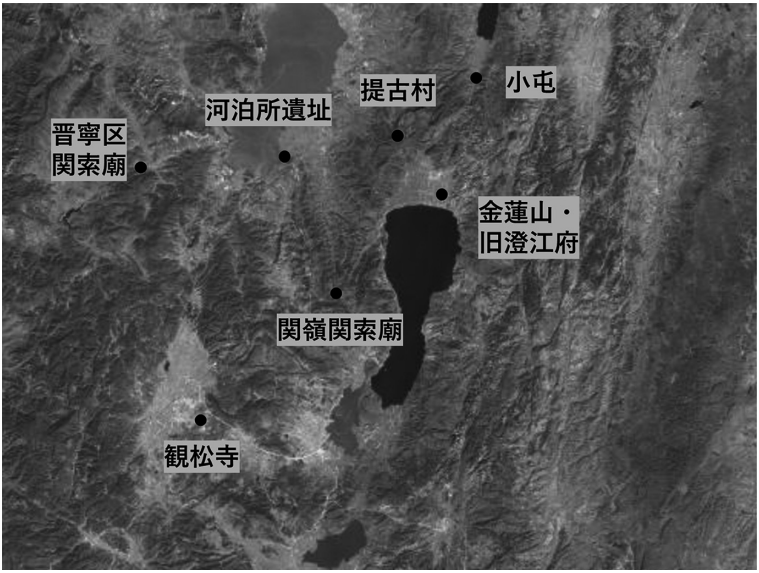
【図32】　南詔鉄柱の赤外線写真

八月一九日（月）

一九日の訪問先は、昆明市晋寧区と玉渓市澄江県・紅塔区にまたがる地域で、明清時代の澄江府にあたる【図33】。ここには関索にまつわる地名が多い。たとえば『雲南志』巻六澄江府条には「關索廟。……相傳關索從諸葛亮南征、命守關隘、故今險要之處皆有廟」とあり、関索が狭隘地の守備を命ぜられたとの伝承に基づき、険要の地に関索廟があるという。地方志には計四ヶ所の関索廟（現澄江市北西の市境付近・晋寧区関嶺村・紅塔区観松寺・晋寧区関索廟）の記録がある。[49] 金文京は、ウリャンハタイとアジュ親子による雲南侵攻路が諸葛南征路とほぼ重なるため、前者の事績が後者に持ち込まれ、関索伝承が残ったとする。[50] また范哲昱は、明朝が雲南統治時に関索を利用したとする。[51]

朝九時、昆明市の宿泊先より出発。九時五九分、澄江市陽宗鎮小屯（24°48'08.6"N 102°58'29.9"E）到着【図34、35】。ここは先鋒営ともいい、関索が南征の先鋒として当地に駐屯したとの伝承に由来する。[52]「関索戯」（関索の劇）が中国で唯一残されている村である。関索戯は中国の国家級非物質文化遺産で、メディア等でも取り上げられている。参考資料として『関索戯志』があり、[53] ボォ・シルヴィによる人類学的研究や、[54] 上田望の研究がある。[55] 関索戯の上演は春節のみとのこと。

小屯の横には福宜高速があり、村の入り口には井戸と溜池がある。村内には関索戯文化広場があり、壁面に蜀の五虎大



【図33】 旧澄江府周辺（鮫島作図）

【図34】　小屯の関索広場

【図35】　関索戯

将軍や、関羽・張飛・呂布の戦闘場面が描かれている。壁の裏に霊峰寺がある。『澄江県志』によると、霊峰寺は康熙二七年（一六八八年）に建立され、道光七年（一八二七年）と一九九四年に重修されている。[56] 普段は開放されていないが、この日はたまたま村内の耕作地の分割にかんする寄合があり、寺内に入れてもらえた。寺には関索戯関連の道具がしまわれ、関索戯の写真も並び、康熙帝期や道光帝期の石碑もあった。

国家級非物質文化遺産伝承人の周如文にお話をうかがうことができた。それによれば、関索戯には三〇〇年の歴史があり、周自身は張飛役の四代目で、すでに三〇年以上も関索戯を上演している。関索戯はもともと疫病を防ぐ目的で、三年間上演しては三年間やめるという方法をとり、劇中の役は特定の家が分担・継承してきたが、現在は若者が村外に出て生活することも多く、継承が困難になりつつある。ただ、村外から興味をもつ人がくるため、彼らに教えている。雲南芸術学院の大学院生などが調査に来ており、フランス人も来たことがあるという。

寺内見学後、関索戯文化広場で周如文と記念撮影。壁面の絵は、五虎大将軍と関羽・張飛・呂布で、劉備は描ききれなかったとのこと。また小屯に関索廟はなく、霊峰寺自体も関索とは関係がないという。村入口の井戸を見学し、小屯を後にする。

一一時三八分、澄江市右所鎮旧城村到着。村内の金蓮山（24°39′07.9″N 102°56′15.6″E）には、明清時代の澄江府城があった。[57] 近くで下車し、徒歩で金蓮山に向かった。途中、東岳廟に立ち寄った。[58] 門前に澄江県重点文物保護単位碑がある。そばの階段から金蓮山に登れた。途中に玄天閣と李恢祠があり、中山大学法学院辨学旧址の碑もあった。到着時に玄天閣と李恢祠の門は閉まっていたので、後回しにした。

玄天閣横の道をしばらく歩き、山の南側にまわると、関三小姐墓があった【図36】。墓石には「漢忠臣興亭侯子李公諱蔚漢忠臣壽亭侯女關氏三姐之墓」（宣統二年（一九一〇年））とあり、墓前に玉渓市文物保護単位碑もある。漢忠臣興亭侯とは李恢のことで、彼は建寧郡兪元県（現在の澄江）の出身、庲降都督使持節領交州刺史として南征で軍功をたて、のちに建寧太守となった。「李蔚（正しくは李遺）」は李恢の息子である。[59] 漢忠臣寿亭侯は関羽で、娘の関三小姐は関銀屏ともよばれるが、『三国志』や『三国志演義』に登場しない。伝承によれば、関銀屏は李蔚と結婚して南征に従軍し、当地に定住した。死後、地元住民が遺体を金蓮山に葬ったという。[60]

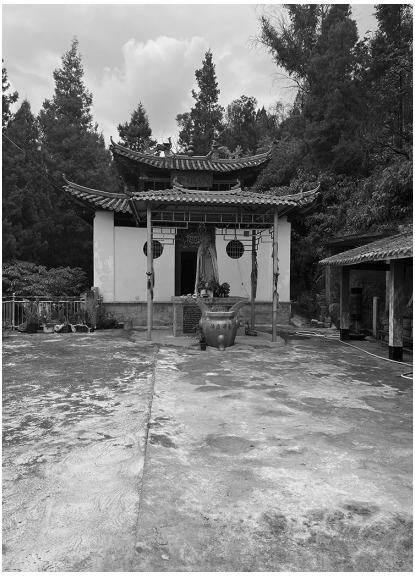
山頂には金蓮山墓葬発掘南区の碑がある【図37】。金蓮山では二〇〇八年～二〇〇九年に戦国～後漢墓二六五基が発掘された。[61] 現在山頂付近は農地となっている。

関三小姐墓と金蓮山古墓群を見学後、玄天閣と李恢祠付近に戻ってきたが、やはり閉門されたままだった。現地民いわく、普段は開いていないとのこと。李恢祠に至っては、そも

【図36】 関三小姐墓

【図37】 金蓮山・学山遺跡

そも門前に張り紙がなされ、我々は当初それを李恢祠だと認識できなかった。だが金蓮山から出発しようとした矢先、通りすがりの旧城村委員会職員の助力を仰ぐことができ、玄天閣と李恢祠への立ち入りが許可された。李恢祠内右側には李恢の事績を描いた壁画があり、正面には鳳凰台があり、李恢・李蔚・関銀屏の位牌が祀られていた【図38、39】。清代には旧城村近くに李恢墓もあったとか。[62] 現地の「修復李恢祠記事功徳碑」によれば、李恢廟は二〇一二～二〇一三年に作られたもので、正殿に李恢・李蔚・関銀屏の霊位を祭っているという。現存する李恢祠は現代のものであるが、いずれにせよ李恢を祭った祠はほかに類例がなく、きわめて特徴的である。その後、玄天閣も見学し、一四時頃に出発。



【図38】　李恢祠

【図39】　李恢祠の壁画

道中で昼食を簡単に済ませ、関嶺村の関索廟へ。正確な位置がわからなかったため、まず村委員会に立ち寄った。現地職員は、廟内の石碑が倒壊する危険もあり、関索廟は非開放だとのべたが、交渉の末、写真撮影にかんする条件付で廟内見学が許された。村委員会から東に省道S一〇三を走ったのち、左手の登山道を登り、途中迷いつつ、羊飼いの老人に道を聞くなどして進んだ。隘路のため、途中で下車した。周囲はタバコ畑で、現地民曰く、特産品だとのこと【図40】。

一六時四一分に関索廟（24°30'59.8"N 102°46'25.2"E）到着【図41】。本廟は龍驤将軍廟ともよばれる。明清地方志によると、成化八年（一四七二年）に付近で虎が害をなし、その捕獲後に廟を一新し、さらに嘉靖三二年（一五五三年）に改建されたという。[63] すると関索廟は遅くとも成化八年（一四七二年）にあったことになる。管理者に門を開けていただき、廟内を見学する（廟内撮影は不許可）。門前の晋寧県文物保護単位碑によれば、廟内には「関将軍廟碑」（嘉靖三二年（一五五三年）立碑）や、清代の「重修漢龍驤将軍廟碑」、「増修関侯廟記碑」、「楊昇庵詩碑」、「羅覲恩石刻」があるとのこと。たしかに廟内には多くの石刻が無雑作に置かれ、比較的新しい功徳碑もあった。一部は踏み石にされ、文章は読めなかった。廟門内の正面には関索像があり、それと背中併せに関羽像があった。前殿内には劉備を中心に張飛・趙雲・黄忠・馬超の像が祀られていた。後殿には諸葛亮を中心に馬

【図40】　タバコ畑

【図41】 関索廟

岱・馬忠・李恢・王平の像が祀られていた。

玉溪市中心部に向かう。一八時四〇分に観松寺（24°19'52.6"N 102°33'36.4"E）に到着【図42】。境内の説明によると、当地には明代末年に関索廟が建立され、いったん文革で破壊され、一九八〇年代に関索廟跡地に観松寺が建てられた。そしてそれは二〇一三年～二〇一五年に大規模改修されたという。関索廟の記録は清代地方志に残る。[64] 現在は第一殿から第一〇殿まであり、関羽をふくむ多種多様な神仏が祀られている。到着が遅く、個々の殿内に入れず、境内を一回りして帰路についた。なお玉溪市中心部には武侯祠もあったはずだが、現存しない。[65]

帰り際にサービスエリアで夕食をとり、昆明市内に戻る。夢南文化主題銘宿に宿泊。

八月二〇日（火）

二〇日の調査地は、昆明市・曲靖市の諸葛南征関係遺跡である。

九時五分、雲南文化主題銘宿出発。

一〇時半、昆明市嵩明県の古盟台・武侯祠（25°20'08.3"N 103°02'10.6"E）着【図43】。『嵩明県志』等によれば、武侯祠は明代に創建され、正殿・廂殿が現存するほか、かつては祠前に火神廟、祠後に振遠亭があったという。一九七九年に修復工事が行われた。[66] 古盟台は現嵩明県の名の由来となっ

【図42】 観松寺

【図43】 古盟台碑

た場所ともいわれ、明中期以降は諸葛亮が蛮と盟約を結んだ地として知られるようになった[67]。我々がみたところ、武侯祠内の中央奥には武侯像があり【図44】、左右には各々花灯展示館と洞経音楽展示館があった。また明・万暦四〇年（一六一二）作の「新建諸葛武侯祠碑記」や、清・康熙元年（一六六二年）の「重修諸葛武侯祠碑記」もあった[68]。かつて「孟獲詔安盟約碑」なる碑もあったが、壊れてしまったという[69]。祠の裏手には「古盟台碑」（一九七九年重修）がある[70]。花灯展示館・洞経音楽展示館は施錠されていたが、ちょうど武侯祠内で楽器を演奏していた一団の厚意で、内部見学ができた。

一一時、古盟台・武侯祠出発。

一二時一五分、曲靖市馬龍区諸葛山麓（25°22'22.6"N 103°

【図44】　曲靖武侯祠内の武侯像

30'03.1"E）着【図45、46】。諸葛山はすでに羅開玉が実地調査している。それによれば、諸葛山は旧県鎮四旗田村の隣に位置し、八㎢に及び、海抜二三〇七ｍで、現地では諸葛亮が南征時にここに布陣したと伝わる。山頂には三〇〇〇㎡ほどの人工的な平地や、二㎡ほどの平たい石と小さな池があり、平たい石は諸葛亮が指揮時に地図を広げた場所、小さな池は諸葛亮が使った貯水池と伝わる。中腹部には環状の塹壕があり、蜀漢軍の塹壕だと語りつがれている。さらに南側の道には人為的な積み石があり、崖に接しているという[71]。以上が羅開玉の調査記録である。現地に向かうと、たしかに山の南西から南東にかけて山を囲むように、人為的に掘られた大規模な溝がある。溝の幅は約一ｍ、深さは場所によって二ｍほどで、脆い岩を掘削して作られている。掘った岩は溝の両側に積まれ、あたかも土手のごとくである。溝は諸葛山麓付近のタバコ等の畑の中を貫き、コンクリート製の橋なども架けられている。しかし溝沿いに登山をしても山道は途中で切れ、水路などと接続されている様子はない。一時間余も登山口を探し、現地民にも質問したが、発見できなかった。一三時五五分、出発。

途中で昼食をとり、五尺道・毒水石刻に向かう。五尺道は秦代に敷設され、道幅が五尺だったことが命名由来とされる[72]。のちの石門道ともいわれる[73]。また毒水石刻については次の伝承がある。諸葛南征時に長旅に疲れた蜀漢軍は九龍山を通り、

【図45】 諸葛山

【図46】 諸葛山に掘られた溝

ついに泉を発見したが、人馬が泉の水を飲むと声の出なくなる者があらわれた。そこで蜀漢軍は石碑を立て、諸葛亮が鞭（あるいは宝剣）で「毒水」と刻み、泉の水が有毒で飲めないことを警告したという。一説には、泉に孔雀が糞をし、それが毒になったともいわれる。[74]

一六時、毒水石刻があるという曲靖市沾益県の山地入口（25°38'31.4"N 103°50'14.5"E）に到着。ここから下車して毒水石刻に向かう。現地民から事前に「地元の人でなければ見つけられない」と忠告され、その言葉どおり、毒水探しは難航し、我々は山中を一時間余もさまよった。高徳地図等のアプリがしめす毒水石刻の位置がやや南側にずれていたことが災いした。一七時頃、山中で山羊三〇頭余を放牧する老爺

に遭遇。交渉の末、老爺が王・森田を毒水石刻に案内するあいだ、柿沼・鮫島が山羊の面倒をみることになった【図47】。

一八時頃に毒水石刻（25°39'07.8"N 103°50'32.1"E）に到着。のち、柿沼・鮫島も合流した【図48、49】。

岩肌に赤文字で「毒水」と記され、左に保存状態のよい石畳の五尺道が残る。そばに沾益県第一批重点文物保護単位「五尺道（含毒水石刻）」（一九九九年立碑）がある。老爺によると、五尺道の一〇〇メートルほど奥に泉が実在したが、現在は枯れてしまったという。実際に歩いてみたが、泉は見当たらなかった。一九時五分に山地入口に戻り、夕食をとった後、曲靖斉滙智能酒店に宿泊。

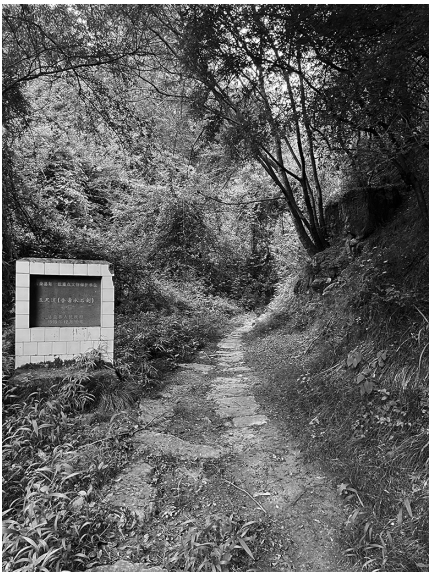
八月二一日（水）

曲靖市・昆明市の古代史関連遺跡を回った。

九時五〇分、爨文化博物館着（無料）。博物館は曲靖市第一中学校に併設され、爨宝子碑と段氏与三十七部会盟碑が展示されていた【図50、51】。爨宝子碑は、碑高約一九〇センチメートル（以下、㎝）、幅約七一㎝、本文三〇字×一三行、下部に題名が四字×一三行、上部の題額は三字×五行である。乾隆四三年（一七七八年）に楊旗田で出土し、東晋頃の石碑と考えられている。[75] 両碑はガラスケースに覆われ、碑全体を目視できる。一〇時一〇分、爨文化博物館出発。

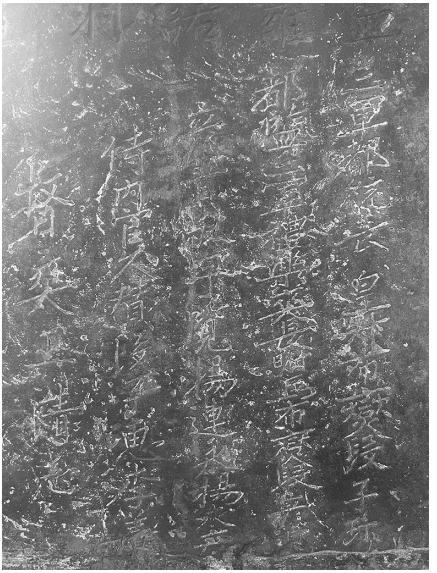
一〇時四五分、曲靖市博物館着。八塔台古墓群・横大路古

【図47】 山羊を管理する柿沼・鮫島

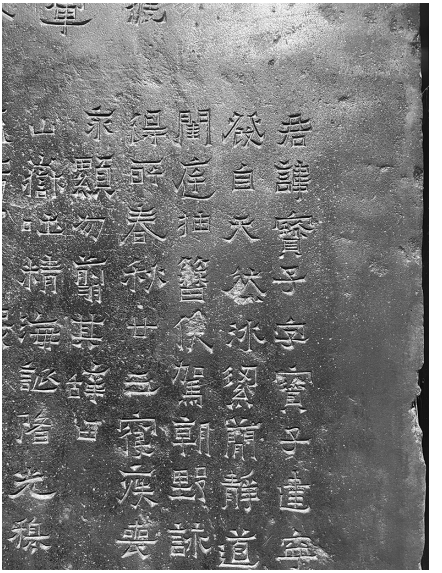


【図49】 五尺道と毒水碑

【図48】「毒水」碑



【図51】 段氏与三十七部会盟碑



【図50】 爨宝子碑

墓群・湛大屯古墓群の出土遺物を実見。予約等不要。一二時、曲靖市博物館出発。

一三時四〇分、八塔台古墓群着【図52】。八塔台古墓群は、一九七七年に数十器の青銅器が見つかり、発掘作業が始まった。墓群の年代は春秋初期～前漢後期と推定されている。[76] 一帯は現在柵に囲まれているが、現地交渉の結果、見学が許可された。八塔台古墓群は八つの発掘区（一～八号堆）に分かれ、継続的に発掘調査が行われている。[77] しかし踏査時の古墓群は柵に囲まれ、内部は鬱蒼と草木が茂り、発掘用の小屋に人影はなかった。発掘区以外の区域には、ところどころ柿・栗・梨などが植えられ、入り口付近には大豆も植えられていた。一四時一五分、八塔台古墓群出発。

一五時一五分、爨龍顔碑着【図53】。爨龍顔碑は、碑高約二七三㎝、幅約一三六㎝、本文は四五字×二四行、碑陰の題名は左右三層に分かれ、上層約一〇字×一五行、中層約一〇字×一七行、下層約一〇字×一六行。上部に穿があり、穿の上に題額四字×六行がある。南朝宋頃の碑とされる。[78] 碑はガラスケースで覆われ、全面を目視できる。一五時三〇分、爨龍顔碑出発。

昆明池沿いを南下。

一七時五三分、河泊所遺跡に到着【図54】。河泊所遺跡は一九五〇年代に発見され、九回の発掘が行われた。発掘地点は一〇ヶ所、七〇〇〇㎡に及ぶ。二〇〇八年には、河泊所周

【図52】　八塔台古墓群

【図53】 爨龍顔碑

辺と北の石寨山古墳等がまとめて河泊所遺跡と命名された。遺跡はおもに漢代に属し、建築・井戸・道路・墓等が発掘され、「滇国相印」のほか、二〇〇〇枚の有字簡と一〇〇〇〇枚の無字簡が出土した。[79] 遺跡の範囲内を南北に通る環湖南路の西側に河泊所村があり、村内では大量の貝殻混じりの土で建てられた民家が見られる。発掘地点は環湖南路の東側に多く、上蒜第一小学の横には考古工作隊の基地がある。周辺はほぼ農地になっている。

河泊所遺跡の北側に石寨山古墳群がある。一八時五四分到着。だが現在は博物館を建設中らしい。現地の職員に挨拶し、少しだけ敷地に立ち入り、全国重点文物保護単位碑を見学した。碑文によれば、石寨山古墳群は一九五五年～一九九六年

【図54】 河泊所遺址文物保護単位碑

に五回発掘され、八七の墓葬から「滇王之印」など五〇〇余件が出土したという。すでに詳細な報告書がある。[80]

昆明市内に戻り、有名な観光地である官渡古鎮を散策。夢南文化主題銘宿に宿泊。以後自由解散。

注

（1）姜南『雲南諸葛南征伝説研究』（民族出版社、二〇一三年、四三～五二頁）、羅開玉『三国南中与諸葛亮』（四川科学技術出版社、二〇一四年、二四七～二四八頁）。

（2）張立新『南詔大理国神游』（雲南大学出版社、二〇〇一年、一七～二一頁）、肖正偉「諸葛亮永昌遺跡考疑」（『保山師専学』第二六巻第三期、二〇〇七年、一九～二〇頁）は、諸葛亮が永昌郡（現在の保山市）まで到達したとする。

（3）顧頡剛・章巽偏著・譚其驤校訂『中国歴史地図集――古代史部分――』（地図出版社、一九五五年、一一頁）、方国瑜「諸葛南征的路線考説」（『思想戦線』一九八〇年第二期、四四頁）、呂思勉「諸葛南征考」（『論学集林』上海教育出版社、一九八七年、七二九～七三〇頁）、寧超「諸葛亮「南征」的若干問題」（『雲南社会科学』一九八一年第二期、六九頁）。

（4）柿沼陽平「三国時代の西南夷社会とその秩序」（『中国古代貨幣経済の持続と転換』汲古書院、二〇一八年、二六九～二七〇頁）。

（5）現地の諸葛亮信仰にかんしては、つとに明・謝肇淛『滇略』巻五が「按、武侯於滇威徳最遠、距今二千年猶人祠而家祝之、其遺蹟故址散見諸郡者不可殫述……諸蠻皆畏之如天地、愛之若祖考、革面革心、悠久無數。嗚呼、其亦可謂聖而不可知也已」と評している。

（6）『後漢書』巻二明帝紀・永平一二年条「十二年春正月、益州徼外夷哀牢王相率内屬、於是置永昌郡、罷益州西部都尉」、巻八六西南夷伝哀牢条「永平十二年、哀牢王柳貌遣子率種人内屬、其稱邑王者七十七人、戸五萬一千八百九十、口五十五萬三千七百一十一。西南去洛陽七千里、顯宗以其地置哀牢・博南二縣、割益州郡西部都尉所領六縣、合爲永昌郡」。『続漢書』郡国志永昌郡条「永昌郡明帝永平十二年分益州置。雒陽西七千二百六十里。八城、戸二十三萬一千八百九十七、口百八十九萬七千三百四十四。不韋出鐵。嶲唐。比蘇。楪榆。邪龍。雲南。哀牢永平中置、故牢王國。博南永平中置。南界出金」。

（7）肖正偉注2前掲論文（一二～一五頁）、姜南注1前掲書（二七～四三頁）、羅開玉注1前掲書（一四八～一六六頁）、羅勇「明以前雲南永昌地区武侯伝説・遺跡与廟宇」（『保山学院学報』第三三巻第三期、二〇一四年、五七～五九頁）、成都武侯祠博物館編著『図説諸葛南征』（科学出版社、二〇一四年）、陳芳「浅談雲貴川旧志所載蜀漢南征之遺存」（『中国地方志』二〇一四年第七期、四七～五一頁）、陳芳「諸葛南征遺存現状考察及相関討論」（『中国文化遺産』二〇一六年第六期、四〇～四二頁）。

（8）江応樑『諸葛武侯与南蛮』（珠海大学、一九四八年）、李福清著・白嗣宏訳「漢族及西南少数民族伝説中的諸葛南征」（『民族文学研究』一九九二年第二期）傅光宇「諸葛南征伝説及其在緬甸的伝播」（『民族芸術研究』一九九五年第五期、一六～二四頁）、羅勇注7前掲論文、五四～五九頁、陽正偉「西晋以来雲南永昌地区的諸葛亮崇拝」（『中華文化論壇』二〇一九年第四期、一三〇～一四三頁）、劉傑「諸葛亮伝説研究――基於西南少数民族地区文史資料的考察――」（雲南師範大学修士学位論文、徐俊六指導、二〇二一年）、柳鴻芝「明清永昌地区社会風俗研究」（雲南大学修士学位論文、陳碧芬指導、二〇二二年、八一～八四頁）。

（9）諸葛営の位置について『大明一統志』『滇志』『雲南通志』『永昌

府志』など明清の地方志はおおむね府城の南一〇里とする。しかし『雲南志』巻一三金歯軍民指揮使司古蹟条は「諸葛營。在司城南一十里」とする一方で、同祠廟条「諸葛武侯廟。在城南七里諸葛營」、「東嶽廟。去城南七里諸葛營内」とし、七里とする。『永昌府志』巻二六俗祀保山県条「東嶽廟。在府城南七里諸葛營」も七里とする。衛星写真によれば永昌府城跡（太保山）～諸葛営遺跡は直線で四・五㎞程。

（10）『大明一統志』巻八七金歯軍民指揮使司祠廟条「武侯廟。在司城南一十里。蜀漢諸葛亮擒孟獲屯營。諸葛之遺民因名諸葛村」、『雲南志』巻一三金歯軍民指揮使司祠廟条「諸葛武侯廟。在城南七里諸葛營。蜀漢建興三年、諸葛亮擒孟獲、定永昌屯營於此。人懐其德、立祠祀之至今、土民自稱爲諸葛遺民、因名諸葛村、有古今題詠」。

（11）『滇志』巻三古蹟永昌府条「諸葛營。在府南十里、武侯屯兵之所。及還、漢人遺此者聚、族而居至今、呼爲舊漢人」。

（12）『大明一統志』巻八七金歯軍民指揮使司山川条「大諸葛堰。在司城南一十五里、其東有東嶽堰及小諸葛堰、皆有灌漑之利」、『滇志』巻三堤閘永昌府条「諸葛堰。有三大堰、在城南十五里、其東爲中堰、又其東爲小堰、視衆水爲廣俗呼海子。歳仲秋障之、仲春開之」。

（13）『雲南通志』巻一三水利永昌府条「諸葛堰。有三武侯所築俱在城南十里。法寶山下曰、大堰甃石爲堤、厚一丈二尺、高一丈、周九百八十餘丈、明成化間、御史朱皚加築、分水口爲三、灌田數千畝。其東曰中堰、源出九龍池三十六號水、併沙河水蓄積爲堰、周三百三十七丈、分水口爲三、灌田數千畝。又東曰下堰、周二百八十丈、分水口爲二、灌田千餘畝」、『永昌府志』巻五九古蹟保山県条「諸葛堰。流於沙河之南、本武侯所濬、久於塞。明成化三年、巡按御史朱皚浚伐石積缶築堤、因名曰御史堤」。

（14）保山市水利電力局編『保山市水利志』（内部発行、一九九三年、五六～五七、一六二～一七二頁）。

（15）肖正偉注2前掲論文（一三頁）。

（16）雲南省保山市志編纂委員会『保山市志』（雲南民族出版社、一九九三年、六九八頁）。観騎楼は、『大明一統志』巻八七金歯軍民指揮使司宮室条に「觀騎樓。在司城南七里、永樂二十年建」『雲南志』巻一三金歯軍民指揮使司台榭条に「觀騎樓。在司城南七里、永樂二十年建」とある。

（17）雲南省文物考古研究所「隆陽漢莊古城趾勘探発掘報告」（『大理民族文化研究論叢』第四輯、二〇一〇年、二六六頁）。

（18）李枝彩「保山諸葛営古城」（『四川文物』一九九五年第五期、五七～五八頁）。

（19）『後漢書』巻八六西南夷列伝哀牢条、李賢注所引古今注「永平十年、置益州西部都尉、居嶲唐」。

（20）『後漢書』巻八六西南夷列伝哀牢条「先是、西部都尉廣漢鄭純爲政清絜、化行夷貊、君長感慕、皆獻土珍、頌德美。天子嘉之、卽以爲永昌太守。純與哀牢夷人約、邑豪歳輸布貫頭衣二領、鹽一斛、以爲常賦、夷俗安之。純自爲都尉、太守、十年卒官。建初元年、哀牢王類牢與守令忿爭、遂殺守令而反叛、攻嶲唐城。太守王尋奔楪榆。哀牢三千餘人攻博南、燔燒民舍」。

（21）雲南省文物考古研究所注17前掲論文（二六八～二八五頁）。保山市文化与旅游局組編『南方絲路永昌道』（雲南大学出版社、二〇二〇年、六五～六六頁）。

（22）保山市文化与旅游局組編注21前掲書（五頁）。

（23）『滇志』巻三古蹟永昌府条に「四川軍萬戸府址在諸葛村後」とあり、諸葛営はモンゴルの軍事拠点ともされた。また後述の咸豊一年（一八六一年）の戦乱でも駐屯地とされている。

（24）羅開玉注1前掲書（三七九～三八〇頁）。

（25）『大明一統志』巻八七金歯軍民指揮使司古蹟条「諸葛營。在司城

南一十里、其東東嶽堰内一土墩周廻三十餘丈高六尺隨水高下雖盛潦不沒俗謂武侯旗臺」、『滇志』巻三古蹟永昌府条「旗臺。在諸葛營前小海子内、武侯竪旗之所、土阜一區、周三十餘丈、隨水高下、雖巨潦亦不能浸」。

(26) 『永昌府志』巻五九古蹟保山県条「右軍書臺。在諸葛營東、舊傳有王羲之手書碑刻、一説卽武侯南征時右軍屯兵之地、乃右軍臺也。或訛寫書臺耳」。

(27) 『永昌府志』巻二八戎事条「十一年辛酉、雲州狗逆、偽揚威都督蔡七兒統賊數萬、由耿馬鎭康入寇……（二月）十四日、賊攻諸葛營時、副將福申出駐諸葛營、仍半籌莫展、且富者吝財、貧者惜力、各分畛域、糧米不准搬運、賊至卽奔」。

(28) 『永昌府志』巻二五典祀保山県条「武侯祠。……一在城南諸葛營、辛酉毀於兵、今未修」。

(29) 羅開玉注1前掲書（三七九～三八〇頁）。

(30) 『雲南志』巻一三金歯軍民指揮使司祠廟条「東嶽廟。去城南七里諸葛營内」、『永昌府志』巻二六俗祀保山県条「東嶽廟。在府城南七里諸葛營、康熙間總兵周化鳳修、後燬於火、乾隆四十七年士庶重建、道光五年知府陳廷焴重修、辛酉兵燹拆毀該地、士庶重修」。

(31) 『滇志』巻二六祀典永昌府条「武侯祠。在府城西。嘉靖間、副使任惟賢建」、『永昌府志』巻二五典祀保山県条「武侯祠。一在太保山頂、舊廢。康熙二十六年重建、總兵偏圖重修、大學士阿桂題額人臣師表、辛酉燹焚燬。光緒五年知縣劉雲章重建一殿、餘未修」。なお『永昌府志』巻二五典祀保山県条「武侯祠。……一在城北滄江橋、唐時建、總兵周化鳳捐修、嘉慶十九年總督伯麟重修、臬司徐繼曾題聯云、丞相天威南人不復反矣、先生未死禮樂其可興乎」によれば、保山市にはもうひとつ武侯祠があったらしい。また『雲南志』巻一三金歯軍民指揮使司祠廟条に「名宦祠。在城中儒学東。弘治十六年、兵備王槐建、祀諸葛亮諸賢」とあり、武侯祠以外にも諸葛亮を祀る廟があった。

(32) 『三国史』蜀書巻四三呂凱伝「閬又降於吳、吳遙署閬爲永昌太守。永昌既在益州郡之西、道路壅塞、與蜀隔絶、而郡太守改易、凱與府丞蜀郡王伉帥厲吏民、閉境拒閬。……亮至南、上表曰「永昌郡吏呂凱・府丞王伉等、執忠絶域、十有餘年、雍閬・高定偪其東北、而凱等守義不與交通。臣不意永昌風俗敦直乃爾」。以凱爲雲南太守、封陽遷亭侯。會爲叛夷所害、子祥嗣。而王伉亦封亭侯、爲永昌太守」。

(33) 保山市中心部の隆陽区の石碑については徐鴻芹点校・中国人民政治協商会議保山市隆陽区委員会編『隆陽碑銘石刻』（雲南美術出版社、二〇〇五年）。

(34) 『永昌府志』巻五九古蹟保山県条「糧堆。在府東南山中墩阜甚多、相傳武侯於此覆糧以示彝人者」、「保山斷脈。卽太保山接脈處、昔武侯過此、掘地以鐵物鎭之、防彝叛也」。また『雲南志』巻一三金歯軍民指揮使司山川条には「九隆山。在司城南七里。山有九嶺、又名九坡嶺。沙河源出於此、相傳哀牢酋九隆居此山下、故名。諸葛亮南征時、鑿斷山脈以泄其氣、有跡存焉」にも断脈の逸話がある。

(35) 『雲南通志』巻二六古蹟永昌府条「金鷄村。在城東五里。蜀漢呂凱故里、今遺跡尚存。後有古蒙千戸所遺跡」。

(36) 『永昌府志』巻二六附寺観保山県条「將臺寺。在城東北三十里金鷄村外」。

(37) 『滇志』巻三古蹟永昌府条「將臺拜釪石。俱在金鷄村温泉之北。臺高丈餘、廣倍之、釪石高五尺、周一丈許。俱蜀漢呂凱建、凱卽金鷄村人」、『雲南通志』巻二六古蹟永昌府条「將臺。在城東金鷄村温泉之北。蜀漢呂凱所築、今遺跡尚存」、『永昌府志』巻五九古蹟保山県条「將臺。在金鷄村北。世傳爲呂凱所築、凱卽本村人。臺高丈餘、廣倍之、今廢」。

(38) 『雲南志』巻一三金齒軍民指揮使司条に「鄉賢祠。在儒学東。舊爲文昌祠、弘治間、副使林俊改祀鄉賢呂凱諸人」、『永昌府志』巻二六俗祀保山県条に「呂張合祠。在太保山。顚祀漢呂凱・明張含、咸豊二年知府彭崧毓建、今廢」とあり、保山には他にも呂凱信仰の場があった。

(39) 『永昌府志』巻五九古蹟保山県条「立舒石。在金鷄村内。高五尺、周三丈許、中斷處深尺餘。相傳呂凱樹戟於此」。

(40) 『雲南通志』巻三山川永昌府条「鳳溪山。在城東北三十里、與安樂山竝峙。上有呂公臺、不韋廢縣在其麓」、巻二六古蹟永昌府条「不韋廢縣。在城東北鳳棲山下。漢武帝置、徙呂嘉子孫居之、以嘉爲不韋後因名」。

(41) 雲南省文物考古研究所注17前掲論文、二八一頁。

(42) 『大明一統志』巻八七金齒軍民指揮使司山川条「哀牢山。在司城東二十里。本名安樂、夷語訛爲哀牢。絶頂有一石如人坐、懷中有二穴、名天井。土人於春首視水之盈涸、以卜歲之豐凶、至者見水溢以爲吉兆。穴下相通、取左穴水則右穴水涸、取右亦然。又山下有一石狀如鼻、二泉出焉、一温一涼、號爲玉泉。故又名玉泉山」。

(43) 『滇志』巻三古蹟永昌府条「諸葛井。在哀牢山、其上一巨石傍有水、謂可飲千人。參將鄧子龍屯兵曾居其地良然」、「諸葛燈。出諸葛井中、土人於星夜常見火光如燈」、『雲南通志』巻二六古蹟永昌府条「諸葛井。在城東二十五里、哀牢山上有二穴、相去一寸五分、各圍三尺許、形圓如盌、水可飲千人。夜有火光。孟春月、居民視井水盈涸以占歲之豐歉。相傳武侯鑿以濟軍者」。

(44) 柿沼注4前掲論文（二六九～二七〇頁）。

(45) 大理喜洲弘圭山墓群の発掘報告は、楊德文「大理喜洲弘圭山漢墓発掘簡報」（『大理民族文化研究論叢』第五輯、二〇一二年、三一三頁～三四三頁）参照。

(46) 明代の天生橋については、明・彭時等纂修『寳寧通志』巻一一一雲南等処承宣布政使司・大理府条「天橋。在趙州西三十五里、又名石馬橋」（方国瑜主編『雲南史料叢刊第七巻』雲南大学出版社、二〇〇一年、一四一頁）、明・李賢等撰『大明一統志』巻八六雲南布政司・大理府条「龍尾關。在点蒼山南、其右有石長丈餘、名天橋、洱河之水過其下、兩岸石險、人不可渡、又名石馬橋」（方国瑜主編『雲南史料叢刊第七巻』雲南大学出版社、二〇〇一年、一八二頁）等参照。明後期～清代の地方志等にも同様の記述がある。また、『嘉慶重修清一統志』巻四七八大理府条所引『明統志』（方国瑜主編『雲南史料叢刊第一三巻』雲南大学出版社、二〇〇一年、五四五頁）には「龍尾關右有石、長丈餘、名天橋、洱河之水過其下、舊名石關、下斷上連」とあり、旧名は「石關」であったという。如上の史料をはじめ、天生橋の関連史料の多くはその所在を「城南三十五里」や「城（趙州）西三十五里」とするが、現存する府城と天生橋の位置関係に鑑みれば、清・顧祖禹『読史方輿紀要』巻一一七雲南五「天橋。府西南三十五里」が妥当。なお寺内の碑文は、民国・張培爵・黄彝『大理県志稿』巻三二「天生橋。在城南三十里。洱河西流處。絶壑深塹、石梁跨之形如人字、憑虛凌空、可度一人、故曰天生橋」を引き、天生橋の由来を説明していた。

(47) 『滇南聞見録』上巻地部天生橋条「去下關里許、山行右側、別有一隅、狀如裂、相距約兩三丈、而山之面兩相湊合、如環橋然、中斷不及尺、可跨而行、名曰天生橋。過橋有一小廟、僧人栖止其中、出入則緣橋行。橋高數丈、其下溪水潺湲、石磴林立、捕魚者列坐列坐其上、眞仙境絶妙劃圖。赴永昌必經之路、余過此者數矣、至今夢寐中時復遇之」（方国瑜主編『雲南史料叢刊第十二巻』雲南大学出版社、二〇〇一年、一五頁）。

(48) 陳愛国「水環境の再生・保全における地域住民主体型の推進体制の構築に関する日中比較研究」（トヨタ財団研究実施調査報告書（https://www.toyotafound.or.jp/old/research/2016/data/D16-R-0806_chin

_fianal_report.pdf（二〇一六年掲載、二〇二四年九月一七日最終閲覧）。

（49）『雲南通志』巻一五祠祀澄江府条「關索廟。一在府城西北。一在江川縣城北關嶺、又名龍驤將軍廟。一在新興州城東南。一在州城北」。うち、今回は関嶺村と観松寺を訪問した。また澄江市北西の関索廟はつとに『雲南志』巻六澄江府条「關索嶺。去州北三十里。高可三十餘丈、以其險峻、必引之以索、而後能渡、若關隘然」、『雲南志』巻六澄江府条「關索廟。在府治西二十五里。提古資鋪東、峯巒高聳、坡坂陡峻、威靈赫奕、行者過下惴惴不敢慢、相傳關索從諸葛亮南征、命守關隘、故今險要之處皆有廟」、『雲南通志』巻三山川澄江府条「關索嶺。在西北二十里。入省大道、山勢險峻、設有三關哨」等に記録が残る。澄江市北西の山間に現存する「提古村」「中関」「下関」等の地名は、前掲史料所見の「提古資鋪」「三関」に由来するとみられる。晋寧区の関索廟は、『雲南通志』巻二六古蹟澄江府条「關索駐驛。在城北。關索嶺有廟」、『澄江府志』巻五古蹟新興州条「關索駐驛。在州北。關索嶺有關索廟」等参照。晋寧区北西に関索廟という地名が現存するが、訪問できなかった。

（50）金文京「解説篇」（古屋昭弘ほか共著『花関索伝の研究』汲古書院、一九八九年、六九～七〇頁）。

（51）范哲昱「関索是否為関羽之子雲南玉溪地区関索信仰調査実録」（『法人』二〇一七年第一一期、八六頁）。

（52）羅開玉注1前掲書（九八頁）。

（53）玉渓地区行署文化局・澂江県文化局編『関索戯志』（文化芸術出版社、一九九二年）。

（54）ボォ・シルヴィ「関索戯とは?中国の「人気宗教」における人類学的事例研究」（『帝京大学外国語外国文化』第一〇号、二〇一九年、一九九～二一一頁）など。

（55）上田望「雲南関索戯とその周辺」（『金沢大学中国語学中国文学教室紀要』第六号、二〇〇三年、六九～九七頁）。

（56）澄江県志編纂委員会編纂『澄江県志』（雲南人民出版社、二〇〇二年、五九九頁）。

（57）『雲南志』巻六澄江府条「金蓮山。一名龜山。高圓平正、若蓮花然。府治學校皆建其上」。

（58）『滇志』巻一六群祀澄江府条に「東嶽廟。在縣東南」、『雲南通志』巻一五祠祀澄江府条に「東嶽廟。在府城東暘晡山下」とあるが、我々が訪れた東岳廟は金蓮山西側の麓にあった。

（59）『三国史』巻四三蜀書李恢伝「遂以恢爲庲降都督、使持節領交州刺史、住平夷縣。先主薨、高定恣睢於越嶲、雍闓跋扈於建寧、朱褒反叛於牂牁。丞相亮南征、先由越嶲、而恢案道向建寧。諸縣大相糾合、圍恢軍於昆明。時恢衆少敵倍、又未得亮聲息、紿謂南人曰「官軍糧盡、欲規退還、吾中間久斥鄉里、乃今得旋、不能復北、欲還與汝等同計謀、故以誠相告」。南人信之、故圍守怠緩。於是恢出擊、大破之、追奔逐北、南至槃江、東接牂牁、與亮聲勢相連。南土平定、恢軍功居多、封漢興亭侯、加安漢將軍。後軍還、南夷復叛、殺害守將。恢身往撲討、鉏盡惡類、徙其豪帥于成都、賦出叟、濮耕牛戰馬金銀犀革、充繼軍資、于時費用不乏。建興七年、以交州屬吳、解恢刺史。更領建寧太守、以還居本郡。徙居漢中、九年卒。子遺嗣」。

（60）澄江県志編纂委員会『澄江県志』（雲南人民出版社、二〇〇二年、六四四頁）。

（61）雲南省文物考古研究所・玉渓市文物管理所・澄江県文物管理所・吉林大学辺疆考古研究中心「雲南澄江県金蓮山墓地二〇〇八～二〇〇九年発掘簡報」（『考古』二〇一一年第一期、一八～三〇頁）。

（62）『澄江府志』巻一二塚墓河陽県条「漢興亭侯李恢墓。在城西五里、山石碑尚存」。

(63) 『雲南志』巻六澄江府条「關索廟。……江川縣北三十里、下有關索嶺、廟在其上。成化八年、有虎爲患、太監錢能道經、廟下禱神獲虎、新其廟」、『滇志』巻一六群祀澄江府条「關索廟。……在江川者、稱龍驤將軍」、『澄江府志』巻五山川江川県条「關索嶺。在縣北二十五里、北瞰昆池、南臨撫仙、一徑盤野萬峰羅列、上有關索廟。按滇黔有關嶺四、此其一也。舊有土巡檢防守」、『澄江府志』巻一二祠祀江川県条「龍驤將軍關侯廟。在關嶺。成化八年、有虎爲患、太監錢能鑄神作獲虎狀、因新其廟。嘉靖三十二年、兵憲濤宗魯改建」。

(64) 『雲南通志』巻一五祠祀澄江府条「關索廟。……一在新興州城東南」。

(65) 『雲南通志』巻一五祠祀澄江府条「武侯祠在新興州城南門外」。

(66) 雲南省嵩明県県志編纂委員会編纂『嵩明県志』(雲南民族出版社、一九九五年、六三二頁)、邱宣充主編『雲南名勝古迹事典』(雲南科技出版社、一九九九年、四四頁)。

(67) 洪武年間(一三六八〜一三九八年)編纂の『元史』巻六一地理志四に「嵩明州、州在中慶東北、治沙札臥城、烏蠻車氏所築、白蠻名爲嵩明。昔漢人居之、後烏・白蠻强盛、漢人徙去、盟誓於此、因號嵩盟、今州南有土臺、盟會處也」とある。また洪武・永楽期史料に基づく明・彭時等纂修『寰寧通志』巻一一一雲南等処承宣布政使司・雲南府条(方国瑜主編『雲南史料叢刊第七巻』雲南大学出版社、二〇〇一年、一三四頁)に「嵩明州。在府城東北百二十里、古滇國地、烏蠻車氏等六種居之、後爲枳氏所奪、因名其地曰枳磑。又嘗漢人築金城于此、曰長州。後因蠻叛、築臺與蠻盟、名其地曰嵩盟」とあり、「寰寧通志」に基づく明・李賢等撰『大明一統志』巻八六雲南布政司・雲南府条(方国瑜主編『雲南史料叢刊第七巻』雲南大学出版社、二〇〇一年、一七三頁)にもほぼ同文がある。これらより、「嵩明」は元来「嵩盟」とよばれ、「嵩盟」は漢人と蛮が当地で行った会盟に由来し、明初にはそこに「土臺」があったことがわかる。一方、景泰年間(一四五〇〜一四五六年)に編纂された明・陳文纂修『景泰雲南図経志書』巻之一雲南府嵩明州条(方国瑜主編『雲南史料叢刊第六巻』雲南大学出版社、二〇〇一年、二九頁)「蜀後主建興三年、諸葛武侯南征、既至南中、所在戰捷、乃與諸酋長會盟于嵩山、卽此地也」は嵩明州設置の沿革をのべ、諸葛亮と嵩明州の関係に触れる。明初〜明中期に嵩明(盟)・古盟台と諸葛亮は関連付けられるようになったか。

(68) 「新建諸葛武侯祠碑記」の録文は、李兆祥『嵩明県文物志』(雲南民族出版社、二〇〇一年、一一三頁〜一一五頁)、蕭霽虹主編『雲南道教碑刻輯録』(中国社会科学出版社、二〇一三年、一三〇〜一三一頁)等。また「重修諸葛武侯祠碑記」の録文は雲南省嵩明県県志編纂委員会注66前掲書(八二四頁)、李兆祥本注前掲書(一一八頁)、蕭霽虹本注前掲書(一九九〜二〇〇頁等)。

(69) 邱宣充注66前掲書四四頁。

(70) 姜南注1前掲書(三八頁)によれば、「古盟台碑」は明・万暦三九年(一六一一年)に州太守孫汝正が建て、「建興三年春正月、丞相亮征四郡、四郡皆平」等とあるらしいが、現碑からは確認できず。

(71) 羅開玉注1前掲書(九〇〜九一頁)。

(72) 『史記』巻一一六西南夷列伝「秦時、常頗略通五尺道、諸此國頗置吏焉」、『史記索隠』「謂棧道廣五尺」、『史記正義』所引『括地志』「五尺道在郎州。顔師古云「其處險阨、故道纔廣五尺」。如淳云「道廣五尺」」。

(73) 銭穆『史記地名考』(商務印書館、二〇〇一年、一四二六頁)。

(74) 毞水石刻伝説については姜南注1前掲書(八一頁)参照。

(75) 方国瑜主編『雲南史料叢刊第一巻』(雲南大学出版社、一九九八年、二四三〜二四五頁)、新津健一郎「爨宝子碑訳注稿——雲南地

域社会史論のためのノート――」（『麻布中学校・高等学校紀要』第一一号、二〇二三年、一四～一六頁）。

（76）八塔台古墓群については雲南省文物考古研究所『曲靖八塔台与横大路』（科学出版社、二〇〇三年）。

（77）康利宏・呉澐・余暁靖・劉忠華「雲南曲靖市八塔台墓地二号堆第七次発掘簡報」（『考古』二〇一八年第一二期、一七～四二頁）。

（78）方国瑜注67前掲書（二三二～二三六頁）、新津健一郎注75前掲論文（二六頁）。

（79）雲南省文物考古研究所・昆明市晋寧区文物管理所「雲南昆明市河泊所青銅時代遺跡」（『考古』二〇二三年第七期、六〇～七八頁）。

（80）雲南省博物館編『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』（文物出版社、一九五九年）、石寨山雲南文物考古研究所編『石寨山文化考古発掘報告集』（科学出版社、二〇一六年）、雲南省文物考古研究所『石寨山文化考古研究論文集』（科学出版社、二〇一八年）など。

【付記】本研究はJSPS科研費（24K04293）の助成を受けたものである。

柿沼陽平（本学教授）
王博（中国社会科学院助理研究員）
鮫島玄樹（本学博士後期課程／清華大学高級進修生）
森田大智（日本学術振興会特別研究員DC／本学博士後期課程）

『史滴』論文投稿規定（雑誌掲載）

一．投稿資格は早稲田大学東洋史懇話会会員に限ります。

二．原稿枚数は、本論・注・地図などあわせて四〇〇字詰め原稿用紙八〇枚以内とし、和文要旨（一二〇〇字以内）、英文タイトル、英文氏名、執筆者紹介資料を添え、ご提出下さい。

三．本誌は一頁二段組で、一頁あたり五四字×二三行、一二四二字（四〇〇字詰め原稿用紙三枚）として換算いたします。また、図版は一段あたり原稿用紙一．五枚として換算しております。

四．原稿のご提出にあたりましては、打ち出し原稿とデータを添え、本会宛にご郵送下さい。

五．提出原稿の執筆に際しては、必ず執筆要領の規定に従って下さい。同要領は請求次第、送呈いたします。

六．締切期日は七月末日とします。査読委員による審査をへて掲載を決定いたします。

〈複写される方へ〉

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、(社)日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結している団体の成員を除き、本会から複写権等の行使の委託を受けている下記の協会から許諾を受けて下さい。著作物の転記・翻訳のような複写以外の許諾は、直接、本早稲田大学東洋史懇話会へご連絡下さい。

〒107-0052　東京都港区赤坂９－６－41　乃木坂ビル　学術著作権協会

TEL：03-3475-5618　FAX：03-3475-5619　E-mail：kammori@msh.biglobe.ne.jp

アメリカ合衆国における複写については、下記に連絡して下さい。

Copyright Clearance Center, Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA

Phone：(978)750-8400　FAX：(978)750-4744　www.copyright.com

〈Notice about photocopying〉

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission from the following organization which has been delegated for copyright for clearance by the copyright owner of this publication.

Except in the USA

Japan Academic Association for copyright Clearance（JAACC）

41-6 Akasaka 9-chome, Minato-ku, Tokyo 107-0052 Japan

TEL：81-3-3475-5618　FAX：81-3-3475-5619　E-mail:kammori@msh.biglobe.ne.jp

In the USA

Copyright Clearance Center. Inc.

222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA

Phone：(978)750-8400　FAX：(978)750-4744　www.copyright.com

史滴　第四十六号

2024年12月20日印刷　　2024年12月30日発行

編集兼発行　早稲田大学東洋史懇話会

印　刷　所　富士リプロ株式会社

〒101-0048　千代田区神田司町２－14

発　行　所　早稲田大学文学部アジア史コース室

〒162-8644　新宿区戸山１－24－１

URL　https://dpt-bun-tousi.w.wasedaa.jp/konwa/

E-mail: wkonwakai@gmail.com

ISSN 0285-4643

SHITEKI

NO.46 December 2024

CONTENTS

FOREWORD:
UEDA Kiheinarichika:2024 in the Asian history course ····· 1
ARTICLES:
CHEN Kanli (KAKINUMA Yohei):
The Second Emperor of Qin in the Records of the Grand Historian and Excavated Documents ····· 2
TOYOTA Hisashi On the word Wen (文) in King Wen (文王) in the Chou dynasty and the origin of the phrase "経緯天地曰文": What does the word Wen (文) mean? ····· 18
LEE Sungsi The Spiritual History of Historian Kibaik Lee ····· 42
BENNOU Saiichi The Development of Rulal Economy in Rongxiang Town, Wuxi County, Jiangsu Province, During Republic of China Period: As a Case Study on the three Villages of Xiaodingxiang, Zhengxiang, and Yangmuqiao ····· 86
TRANSLATIONS:
MAXIM Korolkov (KAKINUMA Yohei, NISSAKA Yuta)
Empire-Building and Market-Making at the Qin Frontier: Imperial Expansion and Economic Change, 221-207 BCE ··· 87
WANG Mingke (HASEGAWA Hirokazu)
Building of Ethnic Groups is Easy, of Citizens is Difficult: How to Observe and Understand Frontier Areas ·····104
PAN Cimei, ZENNG Xianwei (BENNOU Saiichi)
A Strong Woman in Changing Village ·····156
ANNOTED TRANSLATIONS:
Yangzi River Valley Culture Research Institute
An Annotated Translation of the Biography of Xiqiang (西羌) in "Houhanshu (後漢書)" (6) ·····157
The Seminar on the Sung (宋) History
An Annotated Translation on Huangshi Richao (黄氏日抄) vol. 71 (part 4) ·····184
INTRODUCTION OF MATERIALS:
KONITA Akira Was Huang Xing (黄興) a student of Waseda University?: In the Fragment of Historical Record ·····235
FIELDWORK:
KAKINUMA Yohei, WANG Bo, SAMEJIMA Hiroki, MORITA Daichi
A Survey Report on the Relics concerning the Southern Expedition by Zhuge Liang in Yunnan in 2024 ·····242
SAITO Ken, TAKUMA Yoshiyuki, NIITSU Kenichiro, MINEYUKI Saito
A Research Report on Historical Relics and Museums in Xi'an City, Shaanxi Province and Qinghai Province ·····284

OBITURARY: ·····329
MISCELLANEA: ·····332

TŌYŌSHI－KONWAKAI
(THE SOCIETY OF ASIAN STUDIES)
WASEDA UNIVERSITY (TOKYO, JAPAN)